

興味ある問題になるやうに思はれる。尙ほ、此の街道は其の経過する地方全般に互る歴史及び考古學の大部分を支配し、一例を擧げてみると、バーミヤーン諸靈域の如きに就ても首肯すべき唯一の説明を與へるものであると云ふことをも言ひ加へて置きたい。上述の理由に依り、此の本道と其の主要な宿々とに關する研究は、物識りのする道樂とは譯が違ふのである。さうかと言つて、印度と上アジアとの間には當時他の通路が無かつたものだと言つた譯でないのは言ふまでもないことである。遠方を詮議するまでもなく、法師自身も歸りにはインダス河谿谷からバンヌ Bannou, ガズニ Ghazni, ワルダーク Wardāk, カーブール地方及びどうしても通らなくてはならぬカピシ國の縁、それから高いパンヂール谿谷、カーワク Khāwak 峠(三五〇〇米突)、アングラーブ Andarāb 川地方、バタクシャーニ Badakshān 地方及びパミール高原などを經て喀什噶爾及び于闐に辿り着いた其の道もあつた筈であるが、矢張り法師が往路に選んだ方が遙に交通も繁く又一番近道でもあり、結局バクトリア、パンジャーブ兩地間の最も容易な通路で、中々損廢などはしてゐなかつたも